

新・学問のすすめ

宇野重規

『西洋政治思想史』

「研究者が薦める三冊」というのが、お題である。といつても、本誌の読者はアジアについての地域研究にご関心をもつ方がほとんどであろう。ヨーロッパの政治思想史を勉強する筆者が、いったいどのような本を推薦すればよいのか、ふと迷ってしまう。

おそらく、専門分野にこだわらず、およそ学問をすることの意味と難しさについて、考えさせてくれる本がいいだろう。そう思っ、自分の本棚をみて回り、選んできたのが次の三冊である。

● 網野義彦 『古文書返却の旅 — 戦後史学史の一齣』 (中公新書)

いわずと知れた、日本史研究者一押し社会史ブームを起こした著者であるが、その一冊という場合、この本をあげる人は少ないだろう。

『無縁・公界・楽』や『異形の王権』など、網野ファンならおすすめの本がいくらでもあるはずだ。それなのに、筆者はなぜこの本(残念ながら絶版である)に注目するのか。

ある意味で、この本は網野の研究者としての原点を示している。それも本人にとつて、とてもとても苦い原点である。この本を読むことで、はじめて読者は網野がなぜあのような歴史研究を行ったのか、またいかなる経緯で彼が職場を転々としたのか、わかるはずだ。

網野は若い頃、渋沢敬三によって創設された日本常民文化研究所の所員をしていた。渋沢栄一の孫にして大蔵大臣、かつ民俗学の偉大なパトロンであった渋沢の思いでつくられたこの研究所は、戦後、漁村調査に乗り出し、多くの古文書を日本各地から借り受けること

になる。網野もまた、この事業に従事した。ところが、戦後の混乱と不幸な事情からこの研究所は組織再編され、実質的責任者の死去もあって、事業は頓挫してしまう。結果として、多くの古文書が返却されないままになってしまったのである。

このことは網野にとって、重い心の負担になった。彼自身が借りた史料ではなかったにせよ、善意で史料を預けてくれた人々に対する背信であることには変わりがない。なんとか定職についた網野は、日本各地を回り、返却と謝罪の旅に出かけることになる。本書はその顛末を描いたものである。

この旅は、網野にとつて、自らの歴史観を問い直す機会にもなった。かつて、マルクス主義的な歴史観に固執していた網野は、あらためて自分が読み取れていなかった

た古文書の意義に目覚めることになる。最終的に、日本常民文化研究所を引き取るために、網野は神奈川大学へと異動していった。

この本はまず、研究者としての信義について考えさせてくれる。借りた史料を返却するのはあたり前としても、研究者は自分の研究対象に対して、どうすれば信義をはたしたことになるのか。自らの独善的な枠組みで、対象となる人々の暮らしや記録を裁断していかないか。研究に協力してくれた人々の期待を裏切っていないか。これらのことを考えると、およそ人間社会を研究することの難しさを考えてしまう。筆者自身、このことを岩手県釜石市で行った慣れない地域研究で、痛いほど実感することになった。その意味もあって、この本をまずおすすめしたい。

● エドワード・ギボン 『ギボン自伝』 (筑摩書房)

正直いうと、この本も図書館で探すか、中古本として入手していただくしかない。「こういう本ばかりあげるの、いかななものか」という批判がやってくるであろうが、どうかご理解を。

ギボンという『ローマ帝国衰

亡史』で知られる。と云って、この自伝はけつしてとつつきにくいものではない。それではなぜ、一八世紀イギリスのカントリー・ジエントルマンが、このようなローマ史の大著を書くに至ったのか。それも彼は職業的な学者でも歴史家でもなかった。旅をしたり、恋をしたり、家庭内のことで苦勞したりする、ごくごく普通の人間であった。そんな人間が、なぜこのような大きな仕事を始める決意をしたのか。

一八世紀はアマチュア歴史家の時代であったといえ、それまでである。当時、多くの教養ある家庭の子女はギリシア、ローマの古典に触れ、学習の仕上げとしてグランド・ツアーと呼ばれる旅に出かけた。古のローマの地を訪れ、悠久の歴史を思うのが、その目的であった（日本の修学旅行の原点もこれにあるはずだが、だいぶ趣旨が違っている）。ギボンの場合、その趣味が昂じて、ついには自ら歴史の大著を執筆するに至ったというわけだ。

それにしても、ギボンが本の最初の着想を得た瞬間は感動的だ。一七六四年一〇月一五日の夕暮れ時、ローマのカピトリノの廢墟

のユピテル神殿にいたギボンは、フランシスコ修道士が晩禱を唱する声を聞く。その瞬間、彼は『ローマ帝国衰亡史』を執筆する決意を抱いたのである。もちろん、執筆には以後何年もの準備が必要であった。しかし、彼がそのスタート時点で立ったのは、間違いない夕暮れの神殿の廢墟で修道士たちの声を耳にしたその瞬間であった。現代の日本に生きる私たちにすれば、遠い世界の話にしか聞こえないだろう。とはいえ、人が（食べるためでなく）純粹に興味から学問に関心をもち、その延長線上に大きな仕事を成し遂げてしまう瞬間がある。国立大学における人文・社会科学系の存続がうんぬんされる今日だからこそ、このような学問の「メルヘン」を想起させる本を読んでみることに、あるいは意味があるかもしれない。

●三谷太一郎『学問は現実にいかに関わるか』（東京大出版会）

最後は、日本政治史の碩学による学問論である。あまりそういうことを簡単にいいたくないのだが、時間をかけて学問という営みを続けてきた人に、ある種のオーラを

感じることもある。この本の著者は、筆者にとつてまさにそのような一人である。

著者はまず福沢諭吉の『学問のすゝめ』をとりあげる。福沢は「学問」を「働」として捉える。その場合の「働」とは「心身の働」、すなわち精神および身体の活動であるという。つまり福沢は、学問とは単にできあがった知識を学ぶことではなく、精神、そして場合によっては身体を用いて新たな知識をつくり出していく活動だということである。著者はこのような福沢を受けて、学問とは「アート」であること、さらに他者との「対話」によって生み出されるものであると説く（ちなみに、「演説」という言葉をつくったのは福沢であり、societyという言葉の訳に「人間交際」を当てているのも福沢である）。

その後、学問論といえば定番のマックス・ウェーバーをはじめ、オルテガ・イ・ガセット、丸山眞男などを縦横無尽に論じる著者の議論を要約する余裕はここではない。ただ、本書に収録されている「学者はナシヨナリズムの防波堤たれ——国家を超える「学問共同体」の役割——」の末尾にある

「学者は直接国益に奉仕したり、国民感情を代弁したりすべきではない。「学問共同体」の建設を通してしか、問題解決に携われないのではないでしようか」などという一文を読むと、おもわず昨今の研究者が置かれた状況を考えたまうのである。

自分が「学問共同体」なるものにかなる貢献をしているのか、考え出すととたんに不安になる。とはいえ、長い時間をかけて築き上げられた「学問共同体」の末端に属しながら、現代社会の諸課題にどうにか向き合おうとしている苦闘のなかで、本書はまさに「読むと背筋がびんと伸びる本」なのではなからうか。

（うの しげき／東京大学教授）